第 46 回　北海道地方会

会長／並木正義
会場／札幌市医師会館
日時／昭和 58 年 5 月 29 日（日）

1　食道静脈瘤栓塞療法における広角斜視型ファイバースコープ（UGI-G）の有用性

市立旭川病院　内科　○長嶋　知明
黒沢　光俊・奥山　修児・池　薫
柴田　好・武藤　英二・武田　章三
旭川医科大学　第 3 内科　並木　正義

2　中部食道の急性潰瘍辺縁に発生し,得意な経過を示した食道 pm 癌の 1 例

旭川医科大学　第 3 内科
○内海　真・岡村毅与志・原田　一道
上田　則行・水島　和雄・並木　正義

3　胃好酸球肉芽腫の 1 例

石橋胃腸病院
○石橋　勝・横井　正男・久保　英機
旭川医科大学　第 3 内科
水島　和雄・岡村毅与志

4　体腔内走査法による消化器疾患の診断
―脱気水充満法による胃壁病変の診断―

札幌医科大学　第 4 内科
○平田健一郎・斉藤甲斐之助・寺田　省樹
池田　晃・福田　守道
札幌逓信病院　内科　中野　良昭

5　内視鏡的マイクロ波治療の経験

札幌厚生病院　消化器科
○八百坂　透・宮川　宏之・森合　哲也
目黒　高志・開田　博之・近間　敏治
坂井　洋一・堀田　彰一・塚越　洋元
須賀　俊博・村島　義男

6　内視鏡的ポリペクトミーにて摘除した十二指腸球部早期癌の 2 例（確診例 1,疑診例 1）

勤医協中央病院　内科　○松浦　候夫
奥山　敬・仲　紘嗣・河内　秀希
同　病理　仲　綾子・小玉　孝郎

7　内視鏡的逆行性胆管ドレナージ法（ERBD 内療法）の経験

札幌厚生病院　消化器内科　○須賀　俊博
森合　哲也・目黒　高志・開田　博之
近間　敏治・坂井　洋一・堀田　彰一
塚越　洋元・八百坂　透・村島　義男

8　ウイルソン病の姉妹例

旭川医科大学　第 3 内科
○大平　基之・矢崎　康幸・高橋　篤
長谷部千登美・佐藤　仁志・幸田　弘信
石川　裕司・大原　和明・鈴木　貴久
関谷　千尋・並木　正義
同　公衆衛生　土井　陸雄

9　大量の下血を繰り返した空腸動静脈形成異常（Arteriovenous malformation）の術前診断例

旭川医科大学　第 3 内科
○男澤　伸一・浦　等・山野　三紀
久保　英樹・林　英樹・原田　一道
岡村毅與志・水島　和雄・並木　正義

10　術中小腸内視鏡検査にて診断しえた小腸大量出血の 1 例

旭川厚生病院　内科　○加藤　法導
折居　裕・横田　欽一・佐々木春喜
福井　実・都丸　久・成沢　恒男
峯本　博正・杉村　巌・小西　行夫
同　外科　種田　光明

旭川医科大学　第２病理　　片桐　　一
同　第３内科　　岡村毅与志・並木　正義

11　細径大腸内視鏡による全大腸内視鏡学的検査
―特に大腸早期癌症例を中心として―

北海道大学　第３内科　　○斎藤　雅雄
高橋　健二・吉田　純一・洞田　克己
山城　雅明・浅香　正博・宮崎　　保

12 内視鏡的切除を行った横行結腸若年性ポリープの
１例

国立札幌病院・北海道がんセンター　消化器科
○門野　　豊・今村　哲理・別役　　孝
井林　　淳
東札幌病院　内科　　石川　邦嗣

第46回　北海道地方会

会長／並木正義
会場／札幌市医師会館
日時／昭和58年5月29日（日）

1　食道静脈瘤栓塞療法における広角斜視型ファイバースコープ（UGI-G）の有用性

市立旭川病院　内科　○長嶋　知明
黒沢　光俊・奥山　修児・池　薫
柴田　好・武藤　英二・武田　章三
旭川医科大学　第3内科　並木　正義

内視鏡的食道静脈瘤栓塞療法が広く行なわれるようになってきたが，従来この療法専用に作製されたものはなかった．今回われわれは，この療法のために新たに開発された広角斜視型ファイバースコープ(Fujinon UGI-G)を使用する機会を得たので，その有用性について報告した．症例は肝硬変患者3例でいずれも吐血歴を有している．それぞれ静脈瘤栓塞療法を2回施行し，そのうち1回は従来用いていた直視型で施行し，1回はUGI-Gを用いた．UGI-Gは従来型に比し広角のため穿刺後の出血があっても視野が確保できるため安全性に優れ，また鉗子機構があるため穿刺する静脈瘤を選択することが容易で操作性に富むことが確認された．

2　中部食道の急性潰瘍辺縁に発生し，特異な経過を示した食道pm癌の1例

旭川医科大学　第3内科
○内海　真・岡村毅与志・原田　一道
上田　則行・水島　和雄・並木　正義

中部食道潰瘍の発見頻度は比較的低い．今回われわれは，中部食道の急性潰瘍辺縁に発生し，特異な経過を示した食道癌の1例を経験したので報告した．症例は56歳の女性で，前胸部痛と嘔気を主訴として来院，X線および食道内視鏡検査にて，門歯から30 cmの部位に長紡錘形の潰瘍を認め入院した．入院後約2週で潰瘍は，わずかな陥凹を残し治癒所見を示したが，口側陥凹部に周堤の残存を認めた．何度も生検を繰り返すうちに，陥凹の一部より悪性像を得たので手術を施行した．術後の組織学的検索により，腫瘍細胞は粘膜下に存在し，隆起部に限局していた．結局深達度pmの扁平上皮癌であった．肛側は，線状の良性潰瘍瘢痕の所見であった．

3　胃好酸球肉芽腫の1例

石橋胃腸病院
○石橋　勝・横井　正男・久保　英機
旭川医科大学　第3内科
水島　和雄・岡村毅与志

胃好酸球肉芽腫の1例を経験したので報告した．症例は40歳の女性で，悪心を主訴として来院．胃バリウム検査にて前庭部に巨大な隆起性病変を認め，内視鏡検査では広基性のイモ状にうねった粘膜下腫瘍様病変を示し，表面に浅い潰瘍を形成していた．肉腫など悪性病変も否定できないため手術を施行した．切除胃所見では前庭部

に径5 cmの茎を有する，10×10 cmの脳回状の巨大な隆起を呈し，表面は正常粘膜でおおわれていた．組織学的には短紡錘形の線維芽細胞と著明な好酸球浸潤がみられ，間質はややmyxomatousで，紡錘形細胞が層状にまた，1部うずまき状に配列する所もみられ，好酸球肉芽腫と診断した．アニサキス虫体は認められなかった．

4　体腔内走査法による消化器疾患の診断
―脱気水充満法による胃壁病変の診断―

札幌医科大学　第4内科
○平田健一郎・斉藤甲斐之助・寺田　省樹
池田　晃・福田　守道
札幌逓信病院　内科　中野　良昭

胃および胃壁在性病変の診断における超音波内視鏡の評価に関して検討を行なった．

装置および方法）Olympus，Aloka社共同開発の超音波内視鏡II型機，III型機を使用．検査はルーチンの内視鏡観察終了後，吸引排気し脱気水注入，体位変換を行ない走査を行なった．

結果）正常胃壁は五層構造が認められ，幽門部は胃壁の厚みが増加しエコーレベルの低い筋層が明瞭に認められた．胃ポリープ，粘膜下腫瘍，胃癌とくにB-IV型について適確な診断情報が得られたほか，胃外性圧迫像の鑑別診断には必須の診断法と考えられた．

5　内視鏡的マイクロ波治療の経験

札幌厚生病院　消化器科
○八百坂　透・宮川　宏之・森合　哲也
目黒　高志・開田　博之・近間　敏治
坂井　洋一・堀田　彰一・塚越　洋元
須賀　俊博・村島　義男

われわれは，昭和57年9月末より内視鏡的にマイクロ波（極超短波）を用いて，止血，腫瘍の凝固壊死，粘膜下腫瘍の生検などを経験したので報告した．

装置は平和電子工業K.K.製で，マイクロ波発振器，Magnetron空洞結合器，同軸ケーブル，電極（Monopolar Antenna）で構成され足踏スイッチが付備されている．発振周波数2,450 MHz，波長12 cm，最大出力100 wのマイクロ波を医療用マグネトロンにて発生させ，このエネルギーを同軸ケーブルを経て，モノポー3型電極に伝送し，この針状電極を生体組織に刺入した後マイクロ波を発振させるものである症例を供覧した．

6　内視鏡的ポリペクトミーにて摘除した十二指腸球部早期癌の2例（確診例1，疑診例1）

勤医協中央病院　内科　○松浦　俊夫
奥山　敬・仲　紘嗣・河内　秀希
同　病理　仲　綾子・小玉　孝郎

上部消化管内視鏡集検により発見され，内視鏡的ポリペクトミーにて摘除した2例（確診例1，疑診例1）を報告した．確診例症例①，66歳女性，球部に山田IV型ポリープを認め，内視鏡的ポリペクトミーを施行した．摘出標本は，20×15 mmであった．病理組織学的には，腺腫の部と乳頭状腺癌の部からなり深達度mであった．十二指腸腺腫の癌化と考えられた．疑診例症例②，76歳男性，球部に24×20 mmの山田III型ポリープを認め，内視鏡的ポリペクトミーを施行した．病理組織学的には，乳頭状腺癌であり深達度mであった．十二指腸の異所性胃粘膜よりの発生か，胃内の発生かが，不明のために疑診例とした．症例①は，内視鏡的ポリペクトミーのみで，治療した十二指腸早期癌の第1例である．

7　内視鏡的逆行性胆管ドレナージ法（ERBD内瘻法）の経験

札幌厚生病院　消化器内科　○須賀　俊博
森合　哲也・目黒　高志・開田　博之
近間　敏治・坂井　洋一・堀田　彰一
塚越　洋元・八百坂　透・村島　義男

内視鏡的逆行性胆管ドレナージ法（ERBD）のうち内瘻法（Endoscopic Retrograde Internal Biliary Drainage, ERIBD）を4症例に施行し3症例に成功した．JF-1Tおよびヨーロッパクック社，ハナコメディカルのpig tail型チューブを使用した．症例1：78歳女性．乳頭部癌，EPT施行2日後にERBDを施行した．T. Bilは13 mg/dlから術後4日目で3.9 mg/dlと低下し無事，外科転科を果した．症例2：82歳男性．総胆管結石症，結石が大きくEPTによる除去は困難で，胆管炎を反復するためERBDを施行した．手術まで経過良好であった．症例3：63歳女性．上部胆管癌，T. Bil 23→3.9 mg/dlと低下（12日目）．胆石による胆嚢管閉塞があり胆嚢炎を発症して再度発黄し結局胆嚢外瘻術を必要とした．

8　ウイルソン病の姉妹例

旭川医科大学　第3内科
○大平　基之・矢崎　康幸・高橋　篤
長谷部千登美・佐藤　仁志・幸田　弘信
石川　裕司・大原　和明・鈴木　貴久

関谷　千尋・並木　正義
同　公衆衛生　土井　陸雄

abdominal Wilson病の姉妹例を経験したので報告する．症例1は14歳女で主訴は全身倦怠感，入院時黄疸(+)腹水(+)肝機能検査値は肝硬変の像を示した．Kayser-Fleischer ring (+)血清銅，血清ceruloplasmin値が異常低値で尿中銅排泄が著増していた．症例2は12歳女で症例1の妹．特別な症状はない．肝機能検査で肝逸脱酵素と胆道系酵素の中等度の上昇，血清銅，ceruloplasmin値の異常低値と尿中銅排泄の著増を認めた．腹腔鏡検査で脂肪肝の所見を示した．肝組織内銅含有量は症例1が623 μg/g. dw，症例2が1,235 μg/g. dwと著増していた．症例1は肝不全で死亡，症例2はD-Penicillamine療法で経過観察中である．

9　大量の下血を繰り返した空腸動静脈形成異常（Arteriovenous malformation）の術前診断例

旭川医科大学　第3内科
○男澤　伸一・浦　等・山野　三紀
久保　英樹・林　英樹・原田　一道
岡村毅與志・水島　和雄・並木　正義

72歳男の例でタール便と貧血をくり返し，術前に上腸間膜動脈造影で空腸動静脈形成異常と診断し，術中内視鏡にてその出血部位を確認し得た1例を経験したので報告した．上腸間膜動脈造影では動脈相の異常血管増生像，濃染像，流出像を認め，術中の内視鏡検査ではSMT様の小隆起と周囲の毛細血管拡張がみられ，ここが出血部位であることが確認できた．切除腸管における微細血管構築の検討でさらにその点を確かめた．

10　術中小腸内視鏡検査にて診断しえた小腸大量出血の1例

旭川厚生病院　内科　○加藤　法導
折居　裕・横田　欽一・佐々木春喜
福井　実・都丸　久・成沢　恒男
峯本　博正・杉村　巌・小西　行夫
同　外科　種田　光明
旭川医科大学　第2病理　片桐　一
同　第3内科　岡村毅与志・並木　正義

症例は55歳男性，主訴は下痢と微熱，現病歴では昭和58年1月3日より下痢・微熱出現し他院にて加療を受けるも軽快せず当科紹介され入院となった．1月16日・17日と2回の大量下血をきたし緊急手術を施行した．術中小腸内視鏡検査にてTreitz靱帯より18.5 cm肛門側の噴出性出血を認めた．切院標本ではUl-Ⅰ～Ⅱの潰瘍が多発しており，組織学的には非特異性潰瘍と診断された．経過中でレセルピン，ハイドロクロルサイアザイドの投与は受けているがKCl腸溶剤は内服しておらず，他に原因・誘因となるものが不明で，原発性非特異性小腸潰瘍が疑われた．

11　細径大腸内視鏡による全大腸内視鏡学的検査 ―特に大腸早期癌症例を中心として―

北海道大学　第3内科　○斎藤　雅雄
高橋　建二・吉田　純一・洞田　克己
山城　雅明・浅香　正博・宮崎　保

最近，本邦では大腸癌の増加が注目されており，早期診断，治療の必要性が重要視されている．当科では昨年より細径大腸ファイバーによる大腸検査を行なっているがその有用性および大腸早期癌症例らにつき報告する．

昨年1月より本年4月まで当科で行なった大腸内視鏡検査は301例で，そのうち全大腸まで観察しえたのは182例，盲腸へ到達するまでの平均時間は10.8分であった．細径ファイバーは優れた挿入性および患者に与える苦痛の少なさより全大腸内視鏡学的検査には極めて有用な器種と考える．昨年より当科で経験した大腸早期癌は8例で，主訴はほとんどが不定愁訴であり，この点からも積極的に大腸検査を行なう必要があると考える．

12　内視鏡的切除を行った横行結腸若年性ポリープの1例

国立札幌病院・北海道がんセンター　消化器科
○門野　豊・今村　哲理・別役　孝
井林　淳
東札幌病院　内科　石川　邦嗣

大腸の隆起病変は大部分がNeoplastic lesionであるが，稀にNon-neoplastic lesionも経験する．Juvenile polypも比較的稀で，これまで本例も含め4例の内視鏡検査例（994例の内視鏡検査中0.4%）を経験している．最近，本疾患の内視鏡的切除例を経験したので報告する．

（症例）45歳，女性．主訴：下腹部不快感．注腸X線検査で大きさ20 mmのほぼ球形の有茎性隆起を横行結腸に認めた．昭和58年3月16日内視鏡的切除施行．病理組織学的に，ポリープの表層の上皮は一部欠損し，のう胞形成が著明で，間質の浮腫・炎症も著明で，若年性ポリープと診断した．